

ペルソナ C

感動、絹のお洒落を楽しむ旅

世界の女性を魅了した、シルク物語

高齢夫婦。日本のシルクと西欧ファッションの関わりに感動。

夫婦水入らずで、絹遺産の地をドライブ旅行



横浜山の手。外人墓地周辺の洋館を散策する高齢者の女性Cとご主人。
公園のベンチで一休み。

奥さんは持ってきたファッション雑誌に目を通す。

そこに掲載されている、19世紀の貴婦人たち。

彼女たちが身につけているストッキング、身につけているリボンなど、
さらにストッキングがかわいらしい。

Cさん 「まあ、綺麗」
ご主人 「昔の女性は、上品でしとやかで・・・、綺麗だったんだなあ」
Cさん 「まっ（苦笑い）。でも、本当に素敵な衣装」
ご主人 「このストッキング、日本の生糸でできてるんだ」
Cさん 「ほんと、トミオカ・シルクって、あの群馬県の富岡」
ご主人 「そうだよ。かつては日本は絹の国だったんだ」
Cさん 「絹製品って、素敵ね」
ご主人 「日本の絹の品質は世界一だったんだ」
Cさん 「絹、トミオカ・・・」



Cさん 「なんて柔らかいんでしょう」
ガイド 「高品質の生糸が、ここ上州で生まれたものです」



富岡製糸場で、生糸を前に話を聞く夫婦。

ガイド 「糸繰に携わったのは、当時全国から集まった女性たちだったです」
Cさん 「へえ、若い女性たちが、糸繰してたんですね」

当時の労働条件などを聞いて感心する。

工女ファッションを体験（？）

工女の暮らした部屋、日常生活が分かる場所を見学。

ガイド「この地では、日本の近代化に貢献した人々が沢山いたんですよ」

絹に関わった人々の写真。

名前を見ながら・・・

ご主人 「渋沢栄一に、楫取素彦・・・」

Cさん 「楫取素彦って、花燃ゆの文の御兄さんでしょ。あの人も携わっていたのね」

ご主人 「ああ、彼は初代群馬県令だったのだよ」

Cさん 「あら、原富太郎って、あの三溪園の・・・」

ご主人 「そうだよ、横浜で一二を争う生糸商人だったんだ。彼は富岡製糸場の経営にも携わっていたんだ」

Cさん 「すごい、横浜の三溪園を作った人が、ココに関係してたのね」

さらに、

絹製品の数々を眺める。

Cさん 「素敵ね・・・」

手にとって、その美しさに感動。



* 絹で出来た着物や小物類、さらに、石鹼などのアイデア商品に目を見張る。

ガイド 「さらに、この地では、絹を使って、様々な製品作りが体験できるんですよ」

* 絹の織物教室など、手作り教室などを体験するご夫婦。

それぞれの場所で、大いに感心する。

- Cさん 「こんなに手軽に色んなもの作れるなんて、楽しいわ！」
ご主人 「手作りもいいが、おなかがすいたなあ」
Cさん 「まあ、色気より食い気ね」

ドライブして、ご当地グルメに舌鼓。
おっきりこみ、焼きまんじゅう、下仁田ネギ・・・
美味しさにびっくりする夫婦。



そして、

道の駅や、観光スポットに寄る。

- * それぞれの場所の名物や特色に触れる。

満足の表情を浮かべるご夫婦。

車に乗って・・・

- Cさん 「東京から日帰り、絹遺産に触れられるのね」
ご主人 「ああ、美味しいものも食べられるし、今度来る時は、草津にでも寄ろうか」
Cさん 「いいわね、ここだったら、伊香保、万座、軽井沢に行くのもいいわね」

ご主人 「そうそう、磯部温泉もいいなあ」



Cさん 「そうだね、今度はご近所の皆と来ましょうよ」

ご主人 「ああ、今年の町内の旅行は、絹遺産を巡る旅、いいねえ」

Cさん 「そうだね、帰ったら、横浜の三溪園にいきましょうよ」

ご主人 「三溪園か。美しい日本庭園を見ながら上武州の絹遺産を思うのも、なかなか趣があるかもしれないな」

Cさん 「そうしましょ、そうしましょ」

笑顔の二人。

二人を乗せた車が、爽やかに上州路を走り抜けていく・・・。



おわり

